

三匹の彼女(緑色電気集より) カミヤリヨウイチ

ジジとズズとゼゼという、  
ひどくのろまでその上、  
怪獣の中で

最も醜い怪獣がいました。

彼女たちは、怪獣のくせに非力で、

だからどこへ行っても

怪獣からもむろん人間からも、仲間はずれにされていました。

パーティからの帰り道、

僕が車をとばして都心のトンネルへ入ろうとした時でした。

この世のものとは思われない黄昏色のメロディが、流れてきたのです。

オレンジ色の光につつまれたトンネル脇の駐車場には、

三匹の彼女たちがいました。

歌は彼女たちのものでした。

僕の姿を見て彼女たちは逃げようとしたので、思いきって聞いてみました。

「あなたたちには、その理由がわかっているのですか」

彼女たちはひどく驚いた様子でした。

それはそうだろう、話しかけた人間などちょっと考えただけでも、

数百年ぶりに違いないから。

「私たちが醜いからなのでしょう。もう充分わかっております」

いいや、彼女たちこそ、ちっとも理解していない。

僕はひとめ見てわかったのです。

彼女たちのしぐさにこそ、

僕たちすべてが失った《イニシ》が感じられるのだから。